

中国の公共空間における 案内サインの日本語訳に関する研究

邴 胜

中国の公共空間における 案内サインの日本語訳に関する研究

邴 勝

Sheng BING

目次

はじめに

1. 機能主義的翻訳理論概観
2. 公共サインの機能
3. 公共サインのテキストタイプ
4. 公共サイン日本語訳の原則と翻訳戦略に関する検討
 - 4.1 公共サイン日本語訳の原則
 - 4.2 公共サイン日本語訳の戦略

おわりに

[Abstract]

Studies on the Japanese Translation of Chinese Public Signs

Studies on the English translation of Chinese public signs have been improved. However, studies on the Japanese translation of Chinese public signs are still in the primary stage. This paper aims to discuss the functions and characteristics of public signs by adopting the theory of functionalism, on the basis of which, explores its translation principles and strategies. The writer suggests that we should follow the three principles of Conciseness, Interchange Compatibility and Cultural Respect, adopt the four translation strategies of Correspondence, Parallelism, Substitution and Confliction, use the method of Communicative Translation, seek the correspondence of function rather than that of style, and achieve the goal of communication.

はじめに

中国では、公共空間に設置されているサイン（以下「公共サイン¹」と略称）は主に中国語や英語、日本語、韓国語等が併記されているが、現状では、公共サインの翻訳が誤訳だらけで、特に語彙的間違い、文法的間違い、語用的間違い等が目立っていて、研究者に注目され、研究課題となった。中国は観光立国の実現に向けて、積極的に外国人観光客の誘致に力を入れているため、公共サイン翻訳の見直しを推進している。2005年9月、「第

一回全国公共サイン翻訳シンポジウム」が北京で開催され、「中国の国際的イメージを損なわないように、公共サイン翻訳の問題点を検討したうえ、現状を打破するために、迅速に公共サインの外国語翻訳の規範²を制定しなければならない。」と提案された（趙2006）。その後、中国の翻訳界で、英語を中心に、公共サインの翻訳をめぐる、誤訳訂正、翻訳理論・翻訳戦略などの討論を盛んに行った。

公共サイン日本語訳の研究は2010年から始まって、英訳の研究より、立遅れている。

キーワード：公共サイン、機能主義、伝達的翻訳、戦略

Key words: Public Signs, Functionalism, Communicative Translation, Strategies

現在、研究成果が少なく、未だに初歩的な段階にあると言える。数量的に言えば、2010年から2017年現在まで、「中国知網(学術雑誌研究論文データベース)」には、公共サインの翻訳に関する研究論文は計1126あるが、そのうち、日本語訳に関する研究論文は9だけで、全体の0.8%未満を占めている。内容的に言えば、うち7の論文はある特定都市の特定な観光地(例えば、乔家大院、无锡三国城等)を事例にして、公共サインの使用現状、誤訳の分類と訂正等を試みた。代表的なのは、邓等(2013)、肖霞(2015)等がある。翻訳ストラテジーと翻訳原則に関する検討は宮(2016)と施等(2016)だけである。宮(2016)では、従来の公共サインの日本語訳研究を概観した上、日本語と日本文化の特質に結びつけて、日本語表記の活用、同形異義語の翻訳と日本語特有な表現法の三つのポイントから、日本語訳のストラテジーを検討した。施等(2016)では、伝達の翻訳理論を援用し、言語と文化の両レベルで、誤訳の事例分析をし、翻訳原則を論じてみた。

しかし、公共サイン日本語訳に関する従来の研究は特定な観光地のサイン誤訳指摘と訂正の段階にとどまっていて、経験論的な研究が多く、普遍化が難しいと思われる。また、訂正されたそのものが誤訳(例えば「注意安全」を「安全に注意」に翻訳する等)であることも少なくない(宮2016)。更に、理論的検討が不十分で、公共サインの性質と特徴を更に明らかにする必要があるし、翻訳の原則、翻訳ストラテジーに関しては英訳研究の成果を生かして、更に掘り下げて検討する余地が十分にあると考えられる。

そこで、本研究では、機能主義的アプローチで、公共サインの機能と特徴を再検討したうえで、その日本語訳の原則と翻訳ストラテジーを検討することを目的とする。

1. 機能主義的翻訳理論概観

機能主義的翻訳理論は、1970年代～80年代にドイツで台頭し、盛んになった。翻訳のシフトに関する静的な言語類型論より、コミュニケーション重視のアプローチである。機能主義的アプローチでは、翻訳を目的を持った異文化間の行為であると定義し、目標言語の言語形式はそれが果たすべき目的によって決定されるとする(ジェレミー・マンディ著、鳥飼玖美子監訳2009:111)。その代表的理論はフェアメア(独)(Hans J. Vermeer)のスコボス理論、ライス&フェアメア(独)(Reis and Vermeer)の翻訳一般理論や、ホルツ=メンテリ(独)(Holz-Mänttari)の翻訳行為理論である。また、ニューマーク(英)(Peter Newmark)のテキスト機能的分類説とナイダ(米)(Eugene A. Nida)の機能対価理論も言語と機能との関係に注目する点で、機能主義的アプローチと言える(賈2012:69)。

フェアメアは、ライスが1970年代に確立した機能的翻訳理論に基づいて、翻訳ストラテジーと翻訳方法は翻訳の予期的目的や機能によって決定されなければならないと主張し、スコボス理論を打ち立てた。その後、ホルツ=メンテリは行為理論とコミュニケーション理論に基づいて、「翻訳行為」という概念を提示した。翻訳行為を異文化間、言語間のコミュニケーションとしてとらえ、訳出プロセスに焦点を合わせた。1990年代初め、ノード(C. Nord)は機能的翻訳理論の不足を批判し、テキスト分析の要素を取り込んだ精緻化された機能的モデルを提案した。テキストの機能と翻訳目的との関係によって、翻訳を「記録としての翻訳」(Documentary translation)と「道具としての翻訳」(Instrumental translation)に分けた。

ニューマークは、ビューラー(Karl Bühler)

の言語機能説を基に、テキストタイプ説 (Text typology) を打ち立てた。テキストを「情報型 (Informative text)」、「表現型 (Expressive text)」、「訴え型 (Vocative text)」という3つのタイプに分けて、翻訳者は各自のテキスト中の原著者、真実性と目標言語の読者に忠実でなければならないと主張した (賈2012: 70)。また、ニューマークは、テキストタイプによって、異なる翻訳ストラテジーを使用すべきだと主張している。「表現型テキスト」(文学作品等)は「意味的翻訳」(Semantic translation)に重きを置き、なるべく、「一体化」方法、つまり原語の意味、構文構造に似ている手段で、原語の文脈的意味を再現する。「情報型」(報告書や教科書等)と「訴え型」(広告等)のテキストの場合、「伝達の翻訳」(Communicative translation)に重きを置き、目標言語の読者を中心としたコミュニケーションに焦点を当てるべきであると主張している。言い換えれば、情報の完全な伝達が求められ、必要に応じて、明示化処理をしてもいい。目的は目標言語の読者に起点言語の読者と同じ反応の行動をとらせることである。

ナイダによる「機能対価」理論は聖書翻訳の実務から生まれたのである。最初に提示した理論は「動的対価 (dynamic equivalence)」である。「動的対価」とは「訳文の受容者とメッセージの関係が原文の受容者とメッセージの間に存在した関係と実質的に同一でなければならない」、「メッセージは受容者の言語的ニーズと文化的期待に合わせなければならない」(ジェレミー・マンディ著、鳥飼玖美子監訳2009: 66)。つまり、訳文を最大限に起点言語に近づける「自然さ」を追求することである。自然さを満足させるために、言語的、文化的内容の翻案が許されると考えている。ナイダの「機能対価」理論は翻訳と言語機能を結びつけて考える点では、機能主義的理論と同様である。特に応用翻訳分

野での「情報型テキスト」の翻訳において、重要な役割を果たしていると考えられる (賈2012: 83)。

このように、従来の言語的志向の「等価」観念から逸脱した機能主義的翻訳理論は、言語機能を重視し、目標言語読者の立場から、翻訳の本質を分析し、翻訳を意図的なコミュニケーション行為としている。そこで、翻訳者としては、翻訳のプロセスで、目標言語読者の立場に立って、訳文の予期的目的に基づいて、起点言語の情報選択、翻訳ストラテジーの使用、および訳文の表現方式を決定しなければならないと考えられる。

2. 公共サインの機能

公共サインの機能について、様々な研究がなされているが、最も代表的なのは「指示的」、「指令的」、「規制的」、「強制的」といった四分類 (英訳研究による) である (戴等2005)。この分類法は中日翻訳にも当てはまると考えられている。以下は中国にある公共サインの機能と、その特定な表現形式について、整理してみたものである。

「指示的」サインは公衆に対して、指示や説明の情報を提供するものを指す。二種類に分けている。一つは町中、駅、空港、ホテル、レストラン、病院、観光施設等に設置されている施設名、方向、場所等の指示的サインである。例えば、「问讯处 (インフォメーション)」、「紧急出口 (非常口)」、「国际出发 (国際出発)」、「参观路线 (順路)」などである。もう一つは「办公时间 (受付時間)」、「此路封锁 (この先閉鎖中)」、「限乘人数 (最大乗員数)」、「游园须知 (入園案内)」、「饮用水 (これは飲料水です)」等のような時間情報、道路交通情報、注意事項のような説明性を持つ情報指示するサインである。

「指令的」サインは公衆の行動に対して、指導、勧誘、提案、命令をするものを指す。

ふつう、「请」という表現が使用される。例えば、「请节约用水 (水を大切にしましょう, 節水にご協力ください)」、「便后请冲水 (ご使用後は必ず水をお流しください)」、「请系好安全带 (シートベルトをご着用ください)」等である。

「規制的」サインは公衆の行動を制限するためのサインである。そのマーカーは「当心, 小心, 注意 (注意・警告)」、「请勿 (しないように勧める)」、「不许, 不准, 禁止 (禁止類)」である。例えば、「当心台阶, 小心滑倒 (足元注意)」、「请勿吸烟 (おタバコはご遠慮ください)」、「不准停放自行车 (駐輪禁止)」、「禁止拍照 (撮影禁止)」等である。

「強制的」サインは生命危険の恐れがある場合、公衆に嚴重注意するサインを指す。「严禁, 必須」はそのマーカーである。例えば、「严禁携带爆炸物 (爆発物等の危険物持込厳禁)」、「必須戴安全帽 (必ずヘルメットをご着用ください)」である。

3. 公共サインのテキストタイプ

公共サインのテキストタイプに関しては、譚 (2010)、刘等 (2012) では単に「情報型」と「訴え型」の二種類に分け、「指示的」サインは「情報型」で、「指令的」、「規制的」、「強制的」サインは「訴え型」だと主張している。牛 (2008) では公共サイン全体は「訴え型」であると主張している。

しかし、ライスは「実際にはただ1つの機能しか持たないテキスト等はなく、多くのテキストが1つのテキストタイプに限定され得ない」と主張し、「機能に優先順位をつける」とも主張している (モナ・ベイカー等編 藤濤文子監修・編訳2013: 89)。公共サインは公衆に対して、情報の提供によって行動を指示したり、警告によってその行動を規制したり、勧誘、或いは注意によって行動を促したりすることから、「情報提供」と「訴え」の

機能を有し、「情報型」と「訴え型」の結合体であり、「訴え」的機能を主としていると考える。そのうち、「指示的」サインは一見静的で、情報伝達という機能と見受けられる。が、実際、人々に行動を起こすのが、主要な機能である。例えば、「问讯处 (インフォメーション)」という「指示的」サインは困っている人々をあそこに向かうように行動を起こす(「訴え」的機能)ためのサインと言える。

そこで、筆者は公共サインが「情報型」と「訴え型」の両方の機能を兼ねている立場をとる。「指示的」サインは「情報型」に偏っているだけであり、「指令的」、「規制的」、「強制的」サインは明らかに「訴え型」であると主張したい。

したがって、公共サインのような目的性が強い実用的テキストの翻訳においては、ニューマークのテキストタイプ理論に基づいて、読者を中心とした「伝達的翻訳」方法をとるべきである。こうした言語機能志向の翻訳方法で、よりよく情報を伝達し、訴えの効果を果たすことができると思われる。

4. 公共サイン日本語訳の原則と翻訳ストラテジーに関する検討

今までの節では機能主義理論を概観し、公共サインの言語機能とタイプのテキストを明らかにした。本節では機能的翻訳理論の視点から、公共サインの日本語訳原則を検討した後、具体的に公共サインの翻訳ストラテジーについて、論じてみたい。

4.1 公共サイン日本語訳の原則

機能主義理論に基づいて、公共サインを翻訳する際、以下のような「簡潔性」、「互換性」、「文化志向性」の三原則に従わなければならないと主張する。

第一は、簡潔性原則

公共サインはふつう、限られたスペースに書くもので、移動者への瞬時的な情報提供を図るものであるため、速読性が要求される。また、情報をスムーズに提供するため、公共サインは普通の人でも一目ですぐ分かるようなものにしなければならない。そこで、冗長的、分かりづらい訳文を避け、なるべく簡明瞭な言葉で表現すべきである。公共サインの翻訳では、訳文の簡潔さこそが最も基本的な原則であると考えられている。

例えば、「请勿践踏草坪」は中国語で「保护绿草, 留住绿意」「芳草茵茵, 踏之何忍」「人有礼貌, 花儿才笑」「小草有生命, 脚下请留情」「小草微微笑, 请您走便道」等のような文学的表現が使用されているが、日本語に訳す際、通常よく使用されている「芝生に入らないでください」「芝生に入るべからず」のような簡潔な表現を使用することになる。

第二は、互換性原則

互換性とは一種類或いは数種類の記号体系は別の一種類或いは数種類の記号体系への移転であり、原語の意図等は訳語において、十分に保持されている性質を指す(易2000)。公共サイン日本語訳の角度から言えば、中国語サインの元の意図と機能を保持しながら、日本語の言語規則、文化規則にマッチングしなければならない。言い換えれば、日本語訳の際、なるべく同じ文脈、同じ場面で使用する既存の、規範的言語表現、構造を使用することである。

例えば、「国際出発」, 「お手洗い」, 「禁煙」などのような「指示的」サインは通常、借用すればいい。また、「心地滑」, 「小心滑倒」, 「小心台阶」, 「当心踏空」も同様に、「地面が滑る、階段がある」等の付加情報を省略し、すべて日本語の規範的表現である「足元にご注意」に置き換えればいいと考えられる。

第三は、文化志向原則

文化志向原則は「読み手中心」原則ともいう。機能主義的アプローチでは、起点言語の情報を提供すると同時に、目標言語の読者の理解と反応を重要視している。機能の実現を達成するように、「伝達の翻訳」戦略を取らなければならないと主張している。公共サインの翻訳は、日本語母語話者に焦点を当て、その機能の実現は、日本人母語話者に対する影響と反応によって決められている。そこで、公共サインの予期的目的、機能を再現するために、日本語の言語と文化的規範(例えば語気表現)に適合し、訳文を工夫しなければならない。ただ、忠実に原文をコピーするのではなく、大胆な調整を行わなければならないと思われる。

例えば、「票已售出, 概不退换」(切符は売出したら、一概にキャンセルと払い戻しをしない)は一種の注意・警告メッセージとなり、日本人には無愛想で不快な感じがさせられる語気がきつい表現である。そこで、きつい語気を和らげるため、「発券後の取消, 払い戻しはいたしませんので, ご了承ください。」のような「告知+お願い」表現に翻訳すると、日本人にとって受入れやすい表現となるのであろう。

4.2 公共サイン日本語訳の戦略

公共サイン日本語訳の具体的な戦略(移転操作)に関しては、刘(2012)の両言語移転操作モデルが参考に値する。刘(2012)では、両言語の移転操作は基本的に「対応式」, 「平行式」, 「代替式」, 「衝突式」という四つのタイプがあると主張している。公共サイン日本語訳の際、この四タイプの戦略も同様に適用できると思われる。

(1) 対応式移転 (Correspondence)

中日語彙交流史から見れば、中国語と日本

語との接触は江戸時代末期までは、中国語が、一方的に文字・音韻・語彙等多方面にわたって日本語に大きな影響を与えてきた。近代に入って以来は中国語が日本語から語彙を大量に借用するようになった(彭広陸2013)。日本語からの語彙の借用にも二回ほど高潮期があり、一回目は19世紀末期～20世紀初頭で、主に自然科学用語、社会科学用語等を借用した。二回目は1980年以降で、主に衣食住等に関わる用語、抽象的な語彙等を中心として借用した(彭広陸2013)。こうした語彙の交流によって、現代中国語には日本語と同じ語彙が大量存在している結果となる。公共サインにおいても、形式的にも意味的にも機能的にも完全に対応している語彙は少なくない。このような公共サインを翻訳する際、対応式移転操作が勧められる。例えば、「国際到达(国際到着)」、「禁止吸烟(禁煙)」、「停车场(駐車場)」、「消防栓(消火栓)」などのような交通機関、観光施設、宿泊施設に設置されている「指示的」サインは、現実世界にある同一物を指し、同一或いは類似的な連想を引き起こし、それぞれの読者に対して同等な伝達効果を持つことから、直接に「借用」すればいい。また、「注意安全, 请勿靠近(危険! 近づくな, 危険ですので, 近づかないでください)」のような「規制」、「強制」サインの対応式移転も多く見られる。

当然、中日両語の漢字体系が異なる部分があり、それぞれ異なる変化過程を辿ってきたもので、形式的に同じであっても、意味機能上で異なる場合(同形異義)も少なくない。こういう場合、直訳を避けるべきである。例えば、中国語の「文明」は日本語の「文明」とは含意が異なる。中国語の「精神」上の「文明」に対して、日本語では「物質的」な「文化」を指す。そこで、「非物質文明」は直訳の「非物質的文明」ではなく、「無形文化財」としなければならない。(宮2016)。

(2) 平行式移転 (Parallel)

両言語が完全に対応していることは実際には稀である。中国語と日本語とでは、語句の意味、文の含意、文法構造、語順、表現方式等が異なる場合が多い。対応式移転はふつう、最優先に選択される技法ではあるが、最良な選択ではないと考えられている。こういう場合、平行式移転操作を勧める。平行式移転は、同一な言語環境における表現形式が異なるが、それぞれの母語話者にとって同等な効果を持つことを前提条件とする操作である。公共サイン翻訳の場合で言えば、直訳せずに、平行的に機能的に同様な日本語表現に置き換えるのが望ましいことである。

例えば、男性用トイレに「上前一小步, 文明一大步」という使用時にもう少し近づいてもらうための貼り紙がある。中国語は韻律的特徴がある文学的表現で、直訳すれば、「前への小さな一歩は、文明への大きな一歩」となるが、情報伝達の面では問題がないが、冗長さが感じられているし、可読性に欠けている。むしろ、平行的に「綺麗に使いましょう」という「訴え」の機能を果たす日本語既有的の「もう一歩前へ」と平行式移転操作を行う方がいい。他の例を挙げると、

- ・「请继续参观」(×訪問し続けてください)
→「順路」
- ・「您所在的位置」(×あなたがいる位置)
→「現在地」
- ・「注意防火」(×防火に注意)
→「火の用心」「火気厳禁」

このように、公共サインの翻訳においては、日本語母語話者の特有な文化背景、民族性等に適合し、機能的に同等な効果を持つことを前提に、日本語母語話者に受け入れやすい、既有的の表現形式に置き換える平行式移転ストラテジーで翻訳すべきだと思われる。

(3) 代替式移転 (Recasting)

代替式移転は平行式より、さらなる調整や

変換（変通）が許容されるタイプである。言葉遣い、構文など、様々なレベルで代替と創造が可能であるが、その調整は目的語読者の文化背景、受入能力等の要素を考えなければならない（刘2012）。公共サインの日本語訳においては、文化志向性原則に基づいて、訳文の可読性を向上させるために、必要に応じて、原文情報を汲み取った上で大胆に調整しても差し支えない。例えば、「报警电话110」を「通報電話110番」に訳すと、何の通報なのか不明となる。むしろ「通報」の内容が明示化された「犯罪、盗難、交通事故等は110番まで」のように、「犯罪、盗難、交通事故等」で「通報」を代替することによって、サイン情報が日本語母語話者に伝わりやすくなる。他の例は以下のようである。

- ・「服务监督电话」（×サービス監督電話）
→「相談苦情ホットライン」
- ・「请出示身份证件（国際線）」（×身分証明書をご提示ください）
→「旅券をご提示ください」
- ・「注意安全，抓好扶手」（×危ないから，手すりにおつかまりください）
→「車内事故防止のため，手すり・つり革等にしっかりおつかまりください」
- ・「请保管好个人物品」（×きちんと身の回り品を各自で保管してください）
→「貴重品の紛失・盗難にご注意ください」

逆に暗示化する例もある。例えば、電車、バスにある「老弱病残孕专座」というサインを直訳すれば、「老人，体が弱い人，病気の人，身障者，妊婦等の専用座席」となるが、差別されているような感じをさせられるため、それを避けた「優先席」で代替する。

このように、公共サイン翻訳の際、日本語母語話者の言語表現習慣や受入能力等の要素

（文化志向原則）を考え、情報の明示化，暗示化等の手段で、大胆に調整や創造が必要であると考えられる。

（4）衝突式移転（Confliction）

前述の三種類のストラテジーは基本的に同等な機能を持つうえでの形式的対応を追求するタイプであるのに対して、衝突式移転は意味上の対応を追求し、言語形式・構造の対応を割愛するタイプである。表現法の衝突，連想意義の衝突，思惟方式の衝突等が挙げられる（刘2012）。公共サイン日本語訳の場合、「肯定表現」と「否定表現」のような表現法の衝突と「禁止」類サイン等の「語気」上の衝突が目立っていると考えられる。

肯定表現・否定表現の衝突というのは、中国語の肯定表現を日本語の否定表現に、中国語の否定表現を日本語の肯定表現に義務的に訳すことである。例えば、

- ・「请注意看管好您的小孩」（×お子様のお世話をちゃんとしてください）
→「お子様から目を離さないてください」（肯定から否定へ）」
- ・「施工期间，恕不开放」（×工事期間中，開放しないことをお許しください）
→「工事中につき，休業させていただきます」（否定から肯定へ）」
- ・「不间断电源」（×切れない電源）
→「常時給電」（否定から肯定へ）」

次に、「禁止」類サインにおける中日両語語気上の衝突を見てみる。

中国語の「禁止」類サインは「请勿…（—しないでください）」、「不得…，不准…（—してはいけない）」、「禁止…（—禁止）」、「严禁…（—厳禁）」の四種類であるが、日本語の場合、「お願い型」（節水にご協力ください）、「指示型」（敷地内は全域禁煙です）、「呼びかけ型」（ゴミは持ち帰りましょう）、「褒美型」

(いつもキレイに使っていただき、ありがとうございます)と「禁止・厳禁型」(撮影禁止、火気厳禁)の五種類である(宮2016:119)。中国語の「禁止」は語気が強いのにに対して、日本語は「お願い」、「指示」、「呼びかけ」と「褒美」等のような語気を柔らげた表現を使っていることがわかる。例を挙げてみると、

- ・「请勿喧哗」
→「お静かに(お願いします)」
(禁止→お願い)
- ・「禁止乱扔垃圾」
→「清潔な環境作りにご協力をお願いします」
(禁止→お願い)
- ・「禁止浪费水资源」
→「水を大切にしましょう」
(禁止→呼びかけ)
→「節水にご協力ください」
(禁止→お願い)
- ・「适当取食, 请勿浪费」
→「食べ残しを減らそう」, 「残さず食べよう」
(禁止→呼びかけ)
→「食べ残さないでください」
(禁止→お願い)
- ・「公园内严禁垂钓和捕鱼」
→「公園内での釣りや魚類の捕獲は禁止されています。ルール・マナーを守って利用しましょう」
(禁止→指示+呼びかけ)

その他の語気上の衝突に関しては、まず、中国語の「请」(…てください)は通常「お願い」の機能を持つが、日本語の「呼びかけ」、「指示」に訳す場合もある。例えば、

- ・「宠物便后请打扫干净」
→「犬のフンは飼い主が持ち帰りましょう」
(お願い→呼びかけ)
→「フンを拾うのは飼い主のマナー(です)」
(お願い→指示)

また、「注意・警告」のメッセージを「告知+お願い」に訳す。

- ・「票已售出, 概不退换」
→「発券後の取消, 払い戻しはいたしませんので, ご了承ください」(再掲)
(注意・警告→告知+お願い)

更に、中国特有のもの、機能的に部分的にしか対応しない例外な公共サインも存在している。文化的衝突の一つと言える。例えば、「农家乐」(都市近郊にある農家経営のレストラン)は「農業体験」(栽培、収穫など、農業の体験を目的とする旅行)とは内容的に異なっている部分はあり、あえて、固有名詞として「農家楽」という日本の常用漢字で表記することにする(異化)。

おわりに

本研究では、英訳研究の成果を援用して、機能主義的アプローチで、中国における公共サインの機能と特徴を検討したうえ、公共サインの日本語訳の原則とストラテジーを検討してみた。

公共サインの翻訳においては、日本語母語話者の立場に立って、日本語母語話者の文化や受入能力等の要素を考え、情報の分かりやすさを追求する「伝達的翻訳」方法をとるべきである。具体的に、公共サイン日本語訳の際、「対応式」、「平行式」、「代替式」、「衝突式」という四つのストラテジーを使用すべきである。

翻訳実践の角度から見れば、中国と日本は同じ漢字文化圏にあるため、形式上、意味機能上、同様或いは類似な表現が多く存在している。そこで、翻訳者として、個々のケースで「対応式」、「平行式」、「代替式」、「衝突式」の優先順位で翻訳すべきではないかと筆者は思う。当然、この四つのストラテジーは交互

に使用すべきであるが、いずれも交際の目的が達成できることを前提にしなければならない。

(本研究は「中国国家言語文字委員会“十二五”科研企画2015年度委託プロジェクト“公共空間における案内サインの日本語訳規範”NO.WT125-77」による研究である。)

注

¹ 公共サインとは、公共空間において、公衆に対して情報を発信する言葉を指す。「標識」、「誘導」、「道標」、「公告」、「警告」等のサインを含む(丁2006:42)。

² 公共サインの外国語翻訳の規範

公共サインの標準化を図るため、2010年に上海万博の間、上海で「公共サインの外国語翻訳に関するシンポジウム」が開催された。2011年より、正式に「公共サインの外国語翻訳規範の国家基準」の制定をスタートすると決定した。「公共サイン英訳規範」の制定は、北京大学、清華大学、上海外国語大学等8の大学と北京、上海、江蘇省語言文字委員会、外文局等の関連部門と英語母語話者によって行われた。約7年間かけて2017年6月に完成した。公共サインの英訳規範は「共通一般」以外、「交通」、「観光」、「文化」、「娯楽」、「体育」、「教育」、「医療衛生」、「郵便」、「電気通信」、「飲食」、「宿泊」、「商業」、「金融」の13分野を含む。「共通一般」の国家基準が2014年7月15日より施行した。その他は2017年12月1日より施行する予定である(柴明頌;王静2017:5)。

「公共空間における案内サインの日本語訳規範」の制定は主に大連外国語大学日本語学院(筆者はメンバーの一員)によって行われ、2015年3月からスタートした。二年余りかけて2017年9月に完成した。公共サイン日本語訳の規範は、「共通一般」と使用頻度が高い「観光」、「交通」、「その他」の3分野だけである。

参考文献

横田保生(2005)。「公共空間におけるサイン」『日本語学』VOL.24, pp.67-78
志田山智弘他(2011)。「外国人観光客の受入体制整備のための案内サイン計画」『交通工学』1,

pp.50-55

モナ・ベイカー等編 藤濤文字監修・編訳(2013).『翻訳研究のキーワード』研究社

ジェレミー・マンディ著,鳥飼玖美子監訳(2009).『翻訳学入門』みすず書房

彭広陸(2013)。「中国語の新語に見られる日本語からの借用語」『日本語学』11月号(通巻416号), pp.14-25

『国内外旅行者のためのわかりやすい案内サイン標準化指針 東京都版対訳表』

<http://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.jp/tourism/signs/>

「京都市観光案内標識アップグレード指針の策定・整備」について

<http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000108335.html>

丁衡祁(2006)。「努力完善城市公示语 逐步确定参照性译文」《中国翻译》第6期, pp.42-46

戴显宗, 吕和发(2005)。「公示语汉英翻译研究—以2012年奥运会主办城市伦敦为例」《中国翻译》第6期, pp.38-42

邓秀梅, 翁建文, 王欢(2013)。「功能翻译理论视域下旅游景点公示语日译研究—以乔家大院为例」《东北亚外语研究》第2期, pp.88-91

宮伟(2016)。「公示语日译策略研究—基于日语及日本文化特色」《日语学习与研究》第5期, pp.104-111

刘宓庆(2012)。「《新编当代翻译理论(第二版)》中国对外翻译出版有限公司

贾文波(2012)。「《应用翻译功能论(第二版)》中国对外翻译出版有限公司

施文, 祁福鼎(2016)。「从交际翻译理论探究公示语的日文译法」《宁波职业技术学院学报》第4期, pp.70-73

肖霞(2015)。「旅游公示语汉日翻译探究—无锡景区为例」《无锡商业职业技术学院学报》第15卷第3期, pp.101-104

赵湘(2006)。「公示语翻译研究综述」《外语与外语教学》第12期, pp.52-54

刘迎春, 王海燕(2012)。「基于文本类型理论的公示语翻译研究」《中国翻译》第6期, pp.89-92

牛新生(2008)。「公示语文本类型与翻译探析」《外语教学》第3期, pp.89-92

谭碧华(2010)。「公示语的应用示意功能与汉英翻译的新原则」《十堰职业技术学院学报》第2期, pp.80-82

易庆辉(2000)。「话语层翻译的构建标准在翻译分析中的运用」《湘潭大学学报》第4期, pp.135-

137

柴明颖, 王静 (2017). 研制标准化外文译写规范
改善我国国际化语言环境—《公共服务领域英
文译写规范》课题组长柴明颖教授访谈《东
方翻译》第 8 期, pp.4-9